第７回「防災ボランティア活動検討会」

日時　平成 19 年８月 26 日（日）13:00～16:30

場所　京都府府民総合交流プラザ

３．分科会

分科会１「防災ボランティアの安全衛生について」

１．第６回検討会以降における部会の活動（検討）成果の報告

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

それでは、分科会１「防災ボランティアの安全衛生について」を始めます。傍聴していただく皆さんからいろいろご発言もしていただければよろしいかと思います。また、検討委員のご発言の中でこういったことをやっているということを加えていただければ非常にうれしいです。事務局から一人の発言についてはくれぐれも３分を超えないようにということです。なるべく皆さんにはたくさんの話をしていただきたいと存じますので、よろしくお願いします。

一つ目は、第６回検討会以降における部会の活動成果の報告ということで、去年から今年にかけての安全衛生部会活動の成果を確認したいと思います。それぞれ簡単にご発言ください。

洙田（医師・労働衛生コンサルタント）

一番のポイントは「防災ボランティア活動に関する情報・ヒント集」の改訂、そして、６月に安全衛生の関係者が集まって開催した「ボランティアの安全衛生フォーラム」、現場で災害ボランティアに注意喚起ができるように作成した「災害ボランティア活動目からウロコ？の安全プチガイド」と思います。国土交通省「除雪ボランティア活動の安全衛生に関する調査」も調査等で関わっています。

ほかにもさまざまなことをやっていますが、座長の私も全部把握しておりません。つい４～５年前までは僕が個人的に進めていましたが、今は集団体制になっていますので、非常に充実してどんどん進んでいっています。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。ちなみに安全衛生部会は皆さんにも参加いただきたいと思いますが、私と洙田さんと二人座長でやらせていただいています。

フォーラムと「安全プチガイド」は後ほどご参照いただきたいと思います。それから、「情報・ヒント集」作成のお手伝い、サポートということで情報提供させていただきました。それも後で少し時間を割

いて今後改訂についていろいろご討議いただきたいと思います。

今、「安全衛生」というテーマで私たちの部会は進めていますが、本当にボランティア自身の安全、あるいはそれによって住民の皆さんの疲弊を防ぐ、あるいは安全をさらに向上させることがテーマです。それに関連して、応急危険度判定の新たな見方、考え方について室崎さんに報告をお願いしたいと思います。赤・黄色・緑の３つの判別がありますが、われわれボランティアがいかに安全に活動するか、あるいは住民の皆さんのニーズに応えるかについて考えていく必要があります。

室崎（総務省消防庁　消防研究センター　所長）

応急危険度判定は建築士のボランティア活動の一環で、次の余震や大雨が降って、二次災害で家が壊れる危険があるかどうかの判定です。「赤」の判定では建物の中に立ち入ってはいけません。「黄」の判定では、立ち入りをなるべく避ける必要があります。「緑」の判定は調査済みという意味です。調査済みというのは、本当は安全としたいのですが、安全としたために入って死なれたら困るから、緑は調査済みと書きます。

一方で、仮設住宅に引っ越しのときに家の中の片付けをしないといけないのに、「赤」「黄」の判定をされたところには入るなと行政としては注意をします。本来はこういう指導は強制力がなく言う権利がないのですが、ともかく入るなとボランティアが引っ越しの手伝いをしようとしても禁止されてしまうという状況です。だから、いつまでたっても家が片付かないということが他方であります。それから、自衛隊が一生懸命やるものですから、なおさらボランティアが来てもやることがないという事態になります。しかし、片付けてほしいというニーズはあります。黄色が張られているだけで、全くそこのマッチングができないという状況があります。

これをどう解決したらいいか。当然ボランティアの安全性の問題もあるため、誰かれとなく自由に入ってはいけない、黄色でも注意しなさいと言われているからには安全を考えないといけません。他方の被災者からすると早く片付けてほしいという要望が出てきます。だから、被災者の立場とボランティアの立場の両方を重ね合わせて、そこで最適な答えはないのかと考えたときに、一つは最大限ボランティアの安全確保のための手だてや、家屋内に入る条件をボランティアに周知することによって、入れるものについて入っていこうと考えないといけないと思います。そういう意味でこのメモを新潟県知事、柏崎市長、社協に判断材料にしてほしいということでお送りしました。これを送ったことによって次の日からボランティアが黄色の家屋に入れるようになったそうです。

応急危険度判定の紙に書いてある条件の中に、例えば屋根の瓦か落ちる恐れがあるため、黄色の判定があります。ところが、その家に行ったら屋根の瓦はきれいに片付けてあるのです。黄色を張ったときは落ちそうなやつが載っていたのです。次の日に片付けて黄色の条件がなくなったら当然入ってもいいのです。それから、家の前の灯篭が倒れているから入るのは危険ですというものがあります。まさに一つ一つの条件になると最初から入れないのです。だけど、基礎にひびが入っていて、これは素人にはよく分からないという問題で黄色が張ってあるやつもあるのです。

これらは余震が来るから大体張られているのですが、新潟県中越沖地震の場合はかなり早くから余震のおそれがなくなって余震のことは考えないでいい状況になっていました。地震の危険性判定は地震学

者や気象庁の仕事であり、本当に危険かどうかは建築の人の専門的なアドバイスも要るということでうまく連携してやれば、かなりの部分が入れるのではないかと思います。

私なりに整理をしましたが、入るときは昼間に実施する、全体が見えるところに見張りを一人付ける、倒れてきたときを想定して逃げ道を考えてから作業をする、ヘルメット、安全靴、笛などを持って入るなどにまとめました。ただし、これで十分であるのか、個別のケースについてボランティアの対応をどうすればよいのか課題があります。危険があることは事実です。だから、それを否定してはいけなくて、むやみやたらに入ってはいけない。しかし、やはり入ってあげた方がいい。そのときの安全衛生的な指針をしっかり作らないといけないので、今日はぜひここで考えていただきたいと思います。

もう一つは、他の専門家との連携が考えられます。新潟県中越沖地震では屋根瓦のブルーシートを張る作業は消防団が担っていました。消防団とボランティアが一緒に行って、屋根の上の作業はプロがしました。ボランティアが勝手に屋根に上がるのではなく、消防団に任せました。そういう連携することによってうまくこなせる問題もありました。こういった連携の在り方も考えた方がよいと思います。

それから、ボランティアセンターに安全衛生管理の全体を見渡せる人が必要と思います。この検討会のメンバーが常駐するとか、ボランティアを診ているお医者さんが必要と思います。応急危険度判定の黄色が張られたところの立ち入りについてもぜひ考えていただきたいです。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。ぜひいろいろアドバイスを頂ければと思います。今は成果の報告だけで時間を取っていますが、この後の能登半島地震、それから、新潟県中越沖地震に関する話題提供、意見交換で同じように掘り下げていただければいいかと思います。

ほかにフォーラム、19 年度災害ボランティア活動の安全衛生に関する調査を実施しました。これは話題提供してずっと話をしていると報告も長くなりますので、資料を後ほどご覧いただければと思います。

澤野（災害救済ボランティア推進委員会　事務局長）

若干補足すると、部会活動全体は、去年から始めて前半の力点はここに書いてある「除雪ボランティア」です。つまり、おととしが非常に豪雪被害で大変だったので、ボランティアをどう雪かきに活用できるかというテーマが現実のものになって、除雪ボランティアの安全をどう確保するのかということでかなり激論を繰り広げてきたというのが前半の活動です。幸か不幸か去年は逆に雪がなく雪の被害が少ない年だったもので、実際に除雪ボランティアが必要とされて大勢行くということがありませんでした。地域によって毎年繰り広げている除雪ボランティアは別として、そういう機会がなかったので検証できなかったというか、青森への視察も本当に雪があるのかなとか言いながら行ったことがありました。

また、現実的、実践的に冬に向けて検討し、成果も踏まえながら安全衛生フォーラムをやりました。最近は、ボランティアバスや、一般の初心者のボランティアも増えてくる中で、短時間でボランティアの安全衛生の重要性を徹底するかという問題意識の下に簡単な「目からウロコ？」の一枚紙を作ったりしています。あとはバスの中で見てもらうことを想定したビデオを作成中です。そういうかなり実践に

即した作業を進めてきました。

今日冒頭のビデオを見て健康第一ということに感激しました。安全第一よりも健康第一というのはいい言葉だなと思いました。要するに、十分・不十分は別としても、ボランティアセンターでボランティアの健康管理をしなければいけないという意識付けがかなりやられるようになったのがこの間の議論の大きな成果ではないかと思っています。それらも踏まえながら今日の分科会の中で、これからの課題、先ほど室崎さんも言われた課題も議論して、はっきりとした指針はないまでも、そういうものの重要性を喚起することが大事だと思います。

このテーマは結論がなく、本当にケース・バイ・ケースです。指針を作っても、現実に現場を見たら、黄色でも危ないところは危ないし、赤でも安全なところは安全です。そういう意味で、方向づけよりもむしろそういうことを皆さんも真剣に現場で考えてほしいとアピールできればいいと思っています。ボランティアはどちらかというと「行け行け型」の人が多いので、それに冷めた目でブレーキをかけるのは結構大変な作業でありますが、安全衛生分科会の役割は重要ではないかと思います。

今回は大きな事故もけがもないからいいですが、一人現場で死ぬ、ないしは大けがをしたら、今までの活動が全部崩れてしまいます。そういう認識を持ってやってもわらないとだめだなということです。現場を見ていると冷や冷やするような場面が幾らでもあります。幸いちょっとしたかすり傷などは報告されないケースもありますが、今回は熱中症で倒れた方もいましたので、熱中症関係も少し議論した方がいいと思います。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

熱中症は三条市の水害のときにも見られました。

室崎（総務省消防庁　消防研究センター　所長）

だから、三条市のときに「熱中症対策」がつくられたはずです。熱中症対策とすぐ張り出されて多少は活きているのです。それでもやはりなる人は少し出たようですね。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

その辺は次の現地報告で皆さんからも出していただきたいと思います。阪神・淡路大震災以降、本当にたくさんのことを個人の安全について考えているメンバーが発信してきました。そして発信してきたものがだんだんに少しずつ成果になって表れています。でも、その成果が本当に現地で根づいているのか、力になっているのかを検証していかなければいけない時期だと思います。「安全衛生なんていいよ」という時代から 10 年かけて進歩したと感じます。

２．能登半島地震、新潟県中越沖地震に関連する話題提供、意見交換

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

大体こんな感じで１年間やってまいりました。また、次年度にどういうことをやっていくかは最後にまとめさせていただきます。現地でせっかくいろいろ皆さんにご活躍いただいていますので、現地での安全衛生報告、全体報告を頂きたいと思います。

蓮本（近畿福祉大学講師）

新潟県中越沖地震では、刈羽村を中心に何度か現地へ行きました。刈羽村では、この「目からウロコ？」の現物を張り出していただいています。ただ、この内容だけでは足りませんので、現場に行かれる前にいろいろ解説を加えたり、各自が現地に出る前に確認の意味で見てもらったりしました。今はそういう方々からのご意見を頂きながらフィードバックをしています。

今回オブザーバーで参加の方にはあたりまえということが多々あるかと思いますが、この「目からウロコ？」は初めてボランティアに来た方々に見てもらうためにボランティアセンターで配ってみたものだという視点からいろいろとご意見を頂ければと思います。

あとは、室崎先生と一緒に応急危険度判定の件で現地を回りました。周りの家屋が危ないから赤判定を受けている家屋や、赤でもつっかえ棒一つ入れれば作業できる家屋もあるのかもしれませんが、なかなか素人には判断しにくいと思いました。今回災害ボランティアセンターでは建築士の方にもご協力いただいていますが、実際に相談に来られる住民は「うちがどうして赤で、どうすれば入れるのか」ということが分からないので、なかなかその住宅への支援につながらないという事例がありました。

実際に何軒かのお宅では、最初に建築士の方が訪ねた上でボランティアが入っていないところがありました。本当に倒壊の危険があって赤判定が出ているようなところは、住民の方が「こんなところに入ってもらうのは怖いからボランティアの人には入っていただけない」と言いながら、ご自身は入っているというケースもありました。それらのケースのような場合、どうボランティアの安全を担保しつつ、サポートに入るのか。それができないと、どんどん赤判定の家屋が残ったり、「おれたちがやるのだ」とどんどん入っていくグループもいたりしました。それで事故に遭うのは勝手ですが、事故があった場合の社会的なインパクトも考えなければなりません。これから、ボランティアセンター、ボランティア個人、あるいは住民が、安全に作業に従事できるものを考えることが必要だと思います。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。ボランティアから離れるとはいうものの、言うなれば住民同士もボランティア活動をしているわけです。ですから、住民も含めて考えていかなければならない重要なポイントだと思います。

南部（特定非営利活動法人　災害ボランティアネットワーク鈴鹿　理事長）

実は私どもは今回の新潟県中越沖地震のときに梅干しを１トン持っていきました。なぜ梅干しになったかというと、福井の水害のときに松森さんが、熱中症の症状が出てこなかった地域、症状が出た地域の差は梅干しだったと言われて、そんなに梅干しというのはいいのだと思っていたからです。

熊野古道のすぐ横で、しがない梅干しを作っていて何の役に立つのだろうと言っている男の子がいたのです。「いや、それは違うよ。これは何か事があったときに一番役に立つから、頑張れ、頑張れ」と言っていたのですが、今回いち早くその子に電話して提供しました。１個 300 円の梅干しを１トンです。

室崎（総務省消防庁　消防研究センター　所長）

これは南部さんのところから届いていたのですね。ものすごい評判というか、みんな取り合いのようになっていたのです。

南部（特定非営利活動法人　災害ボランティアネットワーク鈴鹿　理事長）

そうなのです。１トンはどれぐらいか全然頭になくて保冷車のようなものを借りて、12 時間かかって現地へ着いて配ったのですが、これを本当に喜んでくれるかどうかも分かりませんでした。それで、「どうせ配るのだったらメッセージを付けよう」ということになって、その晩に寝ないでメッセージを書いて配りました。とても喜んでくださったので、柏崎にも 20 樽持っていったら、断られてしまいました。「うちは基本的に救援物資を受け付けておりませんので」と言われたのです。ナイロンの袋から全部用意して「これを一つずつ持っていってもらってください。絶対に大丈夫なので」と言ったのですが、「そういう余分なことはやりたくないので」と言われました。

すぐ横にこういうセンターがあったので、そこへ行って説明したら、「頂きます」と言われたのです。そこに下ろしたら、住民の人がいち早く見つけて、集まってきました。そこの人たちは快く引き受けてくださったのですが、「決められた時間がありまして、夕方ご飯のときに配りたいと思いますので、ちょっとお待ちください」と言われました。でも、この人たちは今欲しいのです。それで、私たちは外にまだ車から下ろさない梅干しを 10 個配ったらえらいことになって、みんながわあっと取りに来たのです。市民の人が欲しい梅干しと、センターの要らない梅干しと、時間を見てというのも分からないでもないし、いろいろなことが交差した梅干しだったのです。

たった１個の梅干しでこんなにも私たちも勉強になって、こんなにも光輝く梅干しだったのだということにその男の子がいっぺんに目覚めてくれたのです。そこからまたその梅干しをもっと違う形で作りたいと新しいものを作り始めてくれたのです。若者がたった１個の梅干しにこんなにも精力的になってくれるのだということがありました。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。梅干しの話は若者の力ということですね。一つ一つの力が何かの意味をどこかで持ってくるのではないかなとは思っています。ほかの活動はいいですか。

３．情報・ヒント集の改訂に関する意見交換

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

せっかく学生さんたちが行っているので、井上さんを含めて、学生としてどんな目で見て活動されてきたかということに関して、安全衛生ということも考えながら一言頂けますか。

井上（特定非営利活動法人　国際ボランティア学生協会）

現在、東京で大学生をしていまして、今回いろいろな専門家がいる中で発言するのは大変恐縮なのですけれども、個人的に活動してきての話をしたいと思います。

本協会では能登半島地震には６名、新潟県中越沖地震には２週間で延べ 43 名の学生を派遣しました。結果的に今回の派遣は局地的な地震であることから、大量の派遣ではなくて、ある程度の人数で継続してほしいということで、ちょうど学生はテスト期間と重なっていたのですけれども、少人数で継続的に派遣していました。ただ行けばいいという問題ではなく、宿の手配や、いろいろな環境が整った上で行かないと意味がないと思っています。新潟には本協会の支部があり、情報収集や、受け入れを任せられるＯＢがいたため１週間継続で活動しました。

今日は安全衛生に絡めてお話をさせていただくのですが、救援活動に参加するうちの学生は本協会が主催しているＡＥＤの使い方、三角巾での止血の方法などの危機対応講座を受講しないと現地での活動ができないことになっています。ただ、やはり学生なので、活動の基本は現場で住民と向き合ったり、一緒になって汗を流すというのを基本としています。また、隊ではリーダーとは別格で同じ権限を持った安全管理者を付けています。どうしてもリーダーだと目の前の活動とかで視野が狭くなったりしてしまうのですが、安全管理者を付けることによってその周りの安全確認とか、水、休憩、トイレの場所はどこにあるという判断をします。何かあったときの撤収はその人がリーダー以上の権限を持ってやります。

自分たちはお金も、専門的な知識もないですし、本当に簡単な最低限のスキルしかないので、本当にかかわってきた人たちに学生らしく元気を置いてくるということしかできないと思っています。ただ、元気を出していいところと気を遣うところというけじめなんかはしっかりするように心がけています。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。その安全衛生管理者自体も学生さんですよね。その学生の安全管理をする範囲というのは学生内だけだったのですか。それとも、ほかに来ている地域住民の方たちにも声をかけたりなさったのですか。

斉藤（特定非営利活動法人　国際ボランティア学生協会）

安全管理者は、活動範囲がうちの団体だけのときはうちの団体から必ず出すという形で、地域の人たちの責任は取れないし、見られないというところがあるので、うちの団体が任された地域に関してはうちの団体から活動に行って、そこで必ず現場よりも周りを見ている人を一人出そうということをやっています。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）
　では、リーダーというのも学生の中のリーダーですか。仲間の中のリーダーですか。

井上（特定非営利活動法人　国際ボランティア学生協会）
　そうです。現地に行っても現地の人たちに従ってという形です。それと、今回の派遣は関西からは誰も出ていません。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）
　では、オブザーバーの皆さんからもコメントを頂きたいのですが。

船橋（藤田保健衛生大学）
　私は、厚生労働省の研究班で災害時ボランティアのかかわり方という浜松医科大学の尾島教授が班長の研究班に所属しています。その研究班のボランティア調査ということで行かせていただきました。私自身はもともと行政の保健師を長年しておりまして、阪神・淡路大震災のときも神戸市の方に支援に行きましたし、東海集中豪雨も行政の保健師として支援に行った側にいました。

　7月21～23日に柏崎と一部刈羽の方に行きました。実際に私たちはボランティアをしたわけではなく、ボランティアをしている方々と実際に受けておられる住民の方にインタビューに行きました。柏崎のいつもニュースに出てきた一番大きな小学校に行ったときに、私は保健師をやっているからですが、どうしても小さいお子さんをお持ちのお母さんがすごく気になっていました。インタビューでは、赤ちゃんを泣かせないようにする、泣かせるとみんなに一斉ににらまれるというのがありました。それから、1歳ぐらいの子というのは元気がよければ走るのが当たり前なのですが、走らせないようにするにはどうしたらいいかというのを非常にお母さんたちが苦労しておられました。最終日にやっと絵本の読み聞かせのボランティアの方が入られました。でも、それもずっとやっているわけではないので、その時間だけは確かに子供たちは静かなのですが、それがなければ走り回るというのを制止して、避難所のほかの方ににらまれるというようなことでした。とてもとてもしんどいとお母さんたちが言っていました。

　関東の方でキャンピングカーのボランティアたちが来て、そのキャンピングカーの部屋を母子のそういうお母さんたちに夜間だけでも提供できないかというような話があり、いいアイデアだなと思いました。実際には、誰を優先的に入れるのかということがあるので、申し出はあっても動かなくて、現地で調理するだけに終わってしまったということを聞いて、ちょっと残念でした。

　それから、バイク便は非常によく活躍していらっしゃいました。

　ちょうどそのときに柏崎のボランティアセンターがいったん外部の方を中止するというときがありました。なぜ中止されたかというと、要するに、集中してしまって収拾がつかないというようなことを言われたのです。私たちが見た限りでは、一つのボランティアセンターではなくて、サテライトが幾つかあったらと思いました。外からせっかく来られたのに、「ボランティアの受け付けは今はしていません」と言われてしぶしぶ帰る方もいて、気持ちがあっても受けられないのがちょっと残念だなと思いました。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）
　ありがとうございます。その科研のインタビューのアンケートというのはまとめられたのですか。

船橋（藤田保健衛生大学）
　今しています。たまたま突発的に地震があったので行ったという感じなので、もともと研究班の計画の中に入っていたものではなかったのです。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）
　なるほど、分かりました。３月過ぎたらぜひ提供してください。

豊島（ＮＰＯ法人　京都災害ボランティアネット　理事）
　私は今回初めて参加させていただきました。この部会になぜ出たかというと、福知山の方でＮＰＯ法人の福知山ＢＧＭ福祉サービスがあるのですが、その中でまさにこの８月に災害ボランティアエイドというのを立ち上げたわけなのです。目的としましては災害ボランティアの方に対しての安全も含めてのサービスをこれからしていくというものです。まさに今日の全体の中にこの部会があるのと一緒で、ボランティアセンターの中に部会なりそういう部署があって、それを受け持つ人間がいてもいいのではないかということです。それを目的として、これから手探りでやっていこうという中で、こういう部会がありましたので、ぜひこれは聞かせていただきたいと思いましてやってまいりました。

　なぜそれを作ろうと思ったかといいますと、台風 23 号で福知山、大江町、宮津が被災したわけです。規模は全体の今まで日本で起こったものからすれば小さいのですが、僕はこのＮＰＯと並行して赤十字のボランティア団体のレスキューチェーン京都福知山支会のメンバーでもあって、初めてボランティアセンターでボランティアの方に対してうがいの励行と手洗いの励行、それから、宮津におきましては保健師の協会の方と一緒に訪問看護をやらせていただいて、それからこういったことに対して注目するようになりました。まだまだ分からないことがたくさんあるのですが、勉強して、こういう機会を利用させていただいて、どんどん答えを知っていきたいと思いまして参加させていただきました。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）
　みんなざっくばらんにいろいろ話をしているのですが、実際にいかがでしたか。台風後のうがい、手洗い、あるいは当時も熱中症の話とか、いろいろなことがきっとあったかと思います。その辺もまとめて情報提供していただければ被災地の皆さまにお願いしているのですけれども。

豊島（ＮＰＯ法人　京都災害ボランティアネット　理事）
　うがいをするためにはとにかく水が必要なのです。大江町の場合は水は全然なかったわけです。宮津の場合は水の方は来ていましたので、全然状況が違ったわけです。大江町の場合は自衛隊の方に要請し

て、タンクローリーで水を運んでいただいて被災地の人はすべてうがいをしていました。宮津の場合はそれにプラス訪問看護のお風呂の自動車を利用してお湯を作って物品を洗ったり、温かいものでボランティアの方に対して冷たい水を利用させないということをやったのです。

もう一つはボランティアの方々が休憩される場所がボランティアセンターのすぐ裏にありましたので、そこで休憩していただくなり、待機していただくなりしていただいている間に整体の方々に寄っていただいて、ボランティアへのマッサージをお願いしました。これからそういったことも必要になってくるのではないかと考え、お願いしたのがよかったように思います。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。秦さんにまず話をしていただて、澤野さんに最後にまとめていただきます。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

部会に入っていながら、最初だけで後は出席できずに申し訳ありませんでした。阪神・淡路大震災以降、度重なる災害の中でいろいろ出されてきた課題が反映されて、能登半島地震にしろ、新潟県中越沖地震にしろ、いろいろなことが配慮されてきたと感じています。例えば大量にニーズに関係なしに送られる物資はニーズに応じて出していこうとか、ボランティアについてもニーズとシーズの関係を考えられるようになってきたということがあります。ただ、行政がそれに対して一律にというところがまたちょっと弊害になっているかなとか、いろいろなことを感じてきました。

ところで、私はこの１月に北極に行ってきました。目的は二つありまして、一つは部会の中で寒冷地についていろいろ話をしていましたし、もう一つはまちづくりのかかわりから、小さな町、持続可能な町、行政負担の小さい町というのはどうだろうかということからでした。たまたま北極圏の人口 300 人ほど、夏は 2000 人台になるという町に行ったのです。１月ですから、寒くなるときはマイナス 55 度ぐらい、暖かければマイナス 15 度ぐらいで、今年は暖かいということで、マイナス 15 度から 20 度ぐらいでした。日本人が何人か行ったのですが、日本人というのはこうなってしまったのだなと思ったことがあります。行った中に学生さんがいて、寒さで動けない人がいるのです。要するに、寒いところに行くときはカジュアルストアに行けば上から下までそろうという認識なのですが、ただ、日本で売っているダウンジャケットは寒い地方で着る防寒着ではないわけです。新潟県中越地震のときに私はユニクロの送ったダウンウエアは多くの方々を救いましたが、極寒地の寒さに対しても同等の品で間に合うという感覚しかないのだなということを一つ感じました。

もう一つは、この夏に３年目になりますが、ジュニア防災キャンプというのをやりました。去年、日射病、熱射病もどきの子供が何人か出たのです。レスキューバイク隊と一緒にやっていましたから、町歩きをしていて、日射病、熱射病に近い子はバイクに乗せて、もしくは氷を運ばせて、本部に送ってということをやったのです。去年そこまで仕組んで今年は事務局に引き渡したのですが、事務局でそれをやってくれているかなと思ったら、お母さんたちが家の冷蔵庫から氷を持ってきて足りると思っているのです。知識としては持っていても、熱射病や日射病で全身を冷やす、それも複数の参加者に対する備えとしての氷の量を理解できないようです。私たちの恵まれた生活の中では危機管理に適応できないなということを感じてきました。

安全管理の体験をいいますと、新潟県中越地震のときに川口町に行きました。そのとき、私は職業として安全管理にかかわっていましたから、チームを５～６人ずつ組みまして、その中で安全管理要員を決めて、一般ボランティアは黄色、安全管理に関るリーダー格はブルーと決めて、チームごとに一人ずつブルーを着せました。今年県会議員になった人、地元新聞社の記者、横浜市の学校の副校長、横浜市の危機管理をやっている区役所の庶務係長に着せました。要するに、危機管理に対して共通の認識を持てる人を指名してリーダーとして、建物とチームの動き、その家の持ち主との調整、あとは本部との連絡お願いしました。結果的にこれがすごくよかったと思います。

多くのボランティアは個人的に行くのですが、どこかで責任を持てそうな、信頼できるパートナーを見つけてリーダーをお願いすることは救急法でも同じです。信頼できそうな人をパートナーとしてリーダー格にしてチームを作るということです。最初からそういうチームで行ければいいのですが、そうではないので、ヒアリングの中で信頼できるパートナーを見つけて、リーダー格に位置付けをして、責任を持たせていくということがとても大切です。これからボランティアセンターにコーディネーターとして入る人は、信頼に足る人を見つける目を持つことが必要で、バランスを取ってチームとする。そこからでないと安全管理の構築はできないと思いました。

北極のフィンランドの町では町役場がないのです。救急車も、消防署もありません。外ではこんな大きなバケツで火がぼうぼう燃えていて、これが門灯なのですね。立ち話をするときはそこを囲んで話をするような町だったのです。そこの観光協会で言われたのは、保険に入っていますかということです。あとはすべて自己責任です。道路を歩くときは歩道を歩いてください。横断歩道を渡ってください。火の始末をしてください。あとは自己責任で、過ちを犯したら、あなたが痛い思いをするか、あなたのお金で支払うかどっちかです。あとは楽しくお過ごしくださいというものでした。私はこれが今日本に欠けているかなという印象を持ちました。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。そのとおりでもあるし、耳が痛いし、これから開発し考えていかなければいけない部分かなと思います。

それでは、「情報・ヒント集」の改訂に関する意見交換を含めて、ここが助言だ、ポイントだという話をどんどんしていただければと思います。では、口火で澤野さん、お願いします。

澤野（災害救済ボランティア推進委員会　事務局長）

能登半島地震と新潟県中越沖地震の問題で現場を見ていて今回痛感したのは、先ほど専門業者との連携という話がありました。明らかに被災者のニーズに初期段階は応えすぎて、本来ボランティアがやるべきではないような専門業者の仕事をかなりやっているわけです。ブロック塀の撤去や屋根の修理、廃棄物が山積みになっているのをボランティアが仕分けというか、整理したりとかいろいろやっていました。それはたまたま事故がなかったからよいけれども、やっぱり廃棄物の整理も、ブロック塀の撤去も、屋根の修理も危険です。僕らが「そんなのが来たら断れ」と言っても、センターはなかなか断らなかったりする面もありました。今、言ったようなことには専門業者がいるわけです。だから、そういう人たちと連携するということを考えていかないと、何でもボランティアができることになってしまいます。

特に今回は中山間部というか、自分たちで何でもできる人たちの地域がありました。柏崎の一部は違いますが、その部分はちょっと考えないといけないなと思います。素手で平気で廃棄物の仕分けをやっていて、ガラスがあったらどうするのだとか、手袋をしていても、革の手袋なんかしていない、軍手でそんなことができるわけがないというシーンがあった部分で、この辺はやるべきだと思います。

それから、先ほどの黄色の話ですが、われわれが実際に現場でどうするかと言われたら、この辺は知恵の問題で、センターなりがどうこうと多分言えないのです。ケースバイケースだからです。そうなってくると、やっぱり行政なのです。行政がその地区の人たちが本当にそれを必要としているかでやる。建前上、家の中は地元の住民、家の外に出されたものはわれわれボランティアが手伝う。そういう形でやるしかないかなということです。これは一つは知恵の問題です。一律に入っていいというと、これは統制が効かないのです。だから、かなり知恵の問題なのかなということです。そういうものをセンターが弾力的に運用を認めるというのか、イエス、ノーではなくて、その地域が責任を持つならいいとかいう話だなということです。要するに、弾力的に運用した方がいいような分野があって、規則は規則としながら弾力的な運用をするのが知恵の問題かなと思います。

３番目は、今回誰も言わないから言うのですが、今回の新潟県中越沖地震では原子力発電所が絡んでいます。あの安全の問題というのをどの段階で誰が証明したかという問題があります。僕が電話して聞いた保証できるかという質問に関して、するという答えまでかなりの時間があったのです。そういう意味では原子力施設の問題というのは、今回たまたままとまっているから非常にラッキーだった面もあるのですが、その辺も少し視野に入れておかないと、逃げるべきところに突入していくような事態もあると思うのです。

そんなのは強くどうこうというのではないですが、大きな原子力発電所がかなりのダメージも受けている状況で、どこであれを安全だと判断するかというのは、ボランティアも困ったと言えば困っているのです。大丈夫なんですかと聞かれたときに言い切れないのです。これはかなり初期段階の問題ではあったのですが、それが新たな問題だという意味です。ただ、はっきり言って、かなり新潟県中越沖地震は慣れているベテランも多かったし、３年前の経験もあったから、いろいろな問題をそういう経験で乗り切っている部分も多かったのではないかということです。そのほか規模の管理もありました。

洙田（医師・労働衛生コンサルタント）

原発に関しては静岡県にも浜岡原発があって、あそこは東海地震の巣だから怖いですよね。浜松医大の尾島先生のグループの西山先生にお伺いしたいのですが、具体的に静岡県の浜岡原子力発電所に関してはどういう見解を持っておられますか。また、具体的にその研究テーマの中に入っていますか。

船橋（藤田保健衛生大学）

静岡県の問題はちょっと存じ上げていないのですが、研究テーマの中には入っています。当然、危機管理ということで、原子力、テロなどもテーマとしては入っておりました。

洙田（医師・労働衛生コンサルタント）

本格的に取り組んでいらっしゃいますか。

船橋（藤田保健衛生大学）

一応今後の予定では、静岡の取り組みということで現地調査をしていく予定なのです。静岡県はかなりそれについて取り組まれておられます。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。あと、「情報・ヒント集」に加えていいかという話もだいぶ今出てきたかと思いますし、整理という意味で、室崎先生、ある程度の部分は吸い上げていきたいと思うのですが。

室崎（総務省消防庁　消防研究センター　所長）

「情報・ヒント集」の中かどうか分からないですが、ここで検討された知見がきちっと現場に反映される仕組みを作らないといけないと思います。そのためには、僕はボランティアコーディネーターのいろいろな研修をやっていますが、その中で相当な時間を割いてしっかり安全衛生問題を教える必要があると思います。コーディネーターになるような人は素養としてそれを知っているという力をつけないといけないので、コーディネーター研修のカリキュラムの中にしっかりとこれを位置付けないといけないと思いました。

もう一つは、ボランティアのコーディネーターに入っている人は一生懸命やっているボランティアの全体の動きを見ながらやっていきます。単なる健康管理から始まって、心のケアも含めてアドバイスをしたり、指示をするようなボランティアの衛生管理者のようなものが必ずボランティア何名について１名そのセンターにいるというようなシステムを作っていかないといけない。ケースバイケースでその場、その場の状況で事態が変わっているので、一律的に言えないところがあるわけです。

今日はものすごく暑いから熱中症が起きるなと思ったら、「30 分ですぐ休憩を取ってくださいね」と言うとか、「今日は曇りだから少し頑張ってもらってもいいですよ」というようなことも専門家が言わないといけない。一律的に 15 分働いて休めというと、ボランティアも全く作業が進みません。そういう意味でボランティアのための衛生コーディネーターを一人付けるような方向で考える。その派遣費用がなければ、国や「支援Ｐ」でもいいですが、どこかがきちっと出す。そういう意味で派遣をするシステムを作らないといけないのではないでしょうか。それを今度も痛感したのです。今のところはそんなに大きな問題が起きていないから、放っておいて、みんな勝手に動いているのです。だから、それをぜひ検討していただきたいと思います。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございます。司会でなければ私がそれを本当に言いたいと思います。ただ、こういう部会としての提言という形ででもやっとそれが声に出していけるかなという時期だと本当に思っています。ですから、「情報・ヒント集」の中にもそういった部分を強く訴えていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

今後、被災地には、個人がばらばらに行くのではなくて、県、市レベルでチームを編成して、ニーズに応じて支援する仕組み、ニーズとシーズをマッチングさせながらチームで送り出して、チームで送るときに再編成がうまくできるような形にしないと、現場に行ってからでは非常に困難だと思うのです。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

現場は現場でセンターの中に全体で必要ですけれども、ボランティアバスの中で一つのチームが運営されていくような形ということですか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ええ。それは安全性だけではなくて、善意のボランティアが被災地に過度の負担を強いないことでもあります。ニーズがあれば感謝されますが、ニーズがないときにはトイレに始まり地元負担が非常に大きくなる要素もある。ここをセットで考えていく必要があるかなと思っています。

先ほどの危険度判定もなされるのは被災して半月以降です。２週間、３週間たってからです。新潟県中越沖地震などではその前に、壊れていない人は、使えるものを持ってきて物置の中なりで生活するために家の中に入らなければいけないという実情もあるわけです。だから、それも含めてボランティアはチームで入り、一人は安全管理を担うという、支援をセットで考えることが大事かなという気がします。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ありがとうございました。ここで一言言っておきたいという方はいらっしゃいますか。特に「情報・ヒント集」をこれからもっといいものにしていきたいということがありますが、非常に安全衛生にかかわる部分というのが薄いのです。薄いというのは書いてはあるのだけれども、一般論だったりというところがあるので、その辺をもう少し掘り下げて、こういう気候、こういう状況だったらどうかという、今の秦さん、澤野さんからの話に即した部分を追加するのはいかがかなということを私からの意見として言わせていただきたいと思います。

室崎（総務省消防庁　消防研究センター　所長）

ヒント集を見たら、寒冷環境が出てきます。詳細に検討されています。今年のように異常に暑い場合について、熱中症は大体みんなよくご存じだから書かないでもいいかもしれないけれども、極暑の場合についても書いた方がいいと思います。少しでもいいから、暑いときの健康管理の方法を一応載せていた方がいいかもしれません。

南部（特定非営利活動法人　災害ボランティアネットワーク鈴鹿　理事長）

このごろ全然お目にかからないけれども、福井水害で西河原に行ったときに、山の中というのはこれ

が当たり前なのだと思ったことがありました。山の水を引いてきて、ポカリスエットなどの空いた容器に麦茶を冷やして「さあ、どうぞ、どうぞ」とくれるのです。そこのばあちゃんたちが「これは朝から一生懸命沸かしてるで、おいしいで、飲んで、飲んで」と言われたときに「ありがとう」と私たちは平気で飲むのですが、ちょっと若い人は「いや、これは・・・」とすぐ言うのです。私たちは「そんなん死なへんわ」ぐらいに言うのですが、そんな調子にはいけません。絶対に要るお茶であり、工場で作ったお茶が必ずそれよりも衛生的かと言われるとそれは分からないですが、そこのうまい断り方などはありませんかね。山間地に行けば行くほどそうでした。

洙田（医師・労働衛生コンサルタント）

水も煮沸してあったら大丈夫だからね。

南部（特定非営利活動法人　災害ボランティアネットワーク鈴鹿　理事長）

そうでしょう。私だったら、やかんに冷たくしてくださって、そこに湯飲み茶碗が置いてあって、「どうぞ」と言われたら平気で頂いておいしいなと思うのです。でも、ここの中にポカリスエットの容器に麦茶が入っていたときに、それを「ありがとう」と言う人ばかりではないのです。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

お茶を頂かなくとも、勧められた善意にありがとうと言える心遣いが大切ですね。飲物を選択できるということはきっと体が本当に必要としていないのですね。

蓮本（近畿福祉大学　講師）

安全衛生の問題というよりボランティアの人間性の問題だと思います。幾らそれを衛生的で大丈夫と言っても、その好意を受け取れるか、受け取れないかです。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

三条市の水害でもそうです。「冷えた水はないのですか」と言うボランティアがいました。ボランティアセンターで配っているお水は、すごく暑い日だから、冷える間がないわけです。「冷えたのはないのですか」というのとポリ袋入れの水を渡されて「ボトルに入っているのはないのですか」という人もいました。そういう品はお金を出して買う際の選択で、「川の向こうに行けば買えますよ」と返答する話ですね。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

そこを考えてあげるというのは提供する側の努力なのですが、もらうというのか、利用する側は自分の負担で努力をするというのをまず考えると言いたいけれども、そういう人たちだけではないと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会　事務局長）

先ほどの梅干しのように善意でやったのを知らない人も多いから、本人は絶対に口を開いてやったと言えないから、そういうのをどこかで言っておかないといけない。かといって、今度は梅干しが全国から殺到しても困るけれども、やはり塩分が必要だというのはあります。

南部（特定非営利活動法人　災害ボランティアネットワーク鈴鹿　理事長）

それもそうだし、あの梅干しを使ってニーズ調査をするネタになったのがよかったなと思うのです。その梅干し自体に全然光が当たらないのはもっとよかった。テレビで撮影した、新聞に載ったとか、何もなかったところが私はボランティアらしくてよかったなとみんなに言っています。

室崎（総務省消防庁　消防研究センター　所長）

それは口コミで伝えないとね。でも、梅干しの話はだいぶ伝わっていますよ。

南部（特定非営利活動法人　災害ボランティアネットワーク鈴鹿　理事長）

そうですね。渥美さんが、南部地方の梅干しだとずっと思っていたらしいのです（笑）。

室崎（総務省消防庁　消防研究センター　所長）

僕も聞きました。僕も南部の梅だと聞いたから、和歌山の南部のかと思っていたら、南部さんのことだったのですね（笑）。僕も今初めて気が付いたのです。地名ではなかった、固有名詞だったのだと。

４．第６回検討会以降における部会の活動（検討）成果を受けての意見交換および第７回検討会以降の部会の活動（検討）の方向性に関して意見交換

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

ここら辺でやっと盛り上がってくるのですが、時間になっています。最後に、次に向けてわれわれが安全衛生部会として何をしていくかということですが、まずはここにいるみなさんがメンバーに加わってください。成果物がせっかく出てきていますので、この「目からウロコ？の安全プチガイド」のしっかりとしたものをまとめ、バージョンをどんどん上げていきます。それから、ＤＶＤを先ほどご覧いただきましたけれども、本当にいろいろなバージョンで作っていきたいという希望があります。ぜひ学生さんたちには劇団でお手伝いいただければなと思います。

それから、安全衛生についての調査は内閣府にやっていただいて、私たちはその成果をもらっているような部分もあるのですが、こうしたことも続けていきたいと思っています。安全衛生部会は１カ月に１回実際にミーティングをやっていますし、そういった意味では、皆さんにご協力をいただきながら一つ一つ成果物を出して、それが実際に本当に力になっているのかの検証をこれからぜひやっていきたいと思っています。

また、ＤＶＤを作っていくに当たって、作業風景についての画像をかなり撮ってきてはいるのですが、その辺はまだ皆さまにご協力いただいてぜひ活用させていただけるものがあればお願いしたいと思っています。これは全体会でもお願いをしようと思っています。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会　事務局長）

だから、室崎さんが言ったボランティアコーディネーター講習で使えるようなもの教本を作った方がいいのではないかな。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

成果物をみんなに使ってもらう仕組みが必要ですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会　事務局長）

それは重要です。使ってもらってどこがいいか、悪いかを見つけてもらってね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

それで改訂をしていけばいいと思うのです。だから、よければ出したいという出版社もありますので、使ってもらう仕組みを併せて考えていった方がいいように思います。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

もう一つ未来にはもちろん最初の原点に戻って、安全衛生マニュアルの改訂というのもありますので、皆さん忘れずに目標としてお持ちください。最後に伊丹さん、お願いします。

伊丹（内閣府　政策統括官防災担当付企画官）

最後に話題になっていたことでもありますが、安全衛生の調査をボランティアセンターのご協力を得ながらやらせていただいている中で、「情報・ヒント集」などを、ボランティアセンターの方々はなかなか手に取ってということはないのかもしれない論点です。その辺で認識浸透を図っていく手だてを考える必要があるのかな、結果からさらに分析しないといけないのかなと思っています。あるいは今話が出ていましたように、普及といいましょうか、せっかく皆さんの知恵が文字化して形になっていますので、何とか進める手だてを皆さまにもいろいろお知恵を頂いてしなくてはいけないかなと思いました。

２点だけ追加です。新潟県中越沖地震の関係で私も７月 22 日～29 日まで政府現地連絡対策室に出ておりました。そのときに、夏場の地震ということで半袖、短パン、極端にいうとサンダル履きで来られたボランティアの方がおられて、被災地の方も困っているというか、どう安全確保をするかだいぶ腐心されていたというようなことを聞いています。大けがはたくさんでもなかったようですが、ヒヤリハット的なけがで病院に連れて行ったりするケースも多かったということを聞いています。最終的にどう推

移しているかよく把握しておりませんが、そういう安全衛生面の状況を、初心者の方というか、あまり経験はないけれども志を持っていこうと思っていただいた方にどう浸透させていくのかなというのが一点ありました。

　それから、南部さんの梅干しの話は私も刈羽に行ったときに伺いました。いいきっかけだなと思ったのですが、やはり持ち込んでいただいたものの受け入れというのは難しく悩ましく、安全衛生の話とは外れるかもしれませんが、うまくマッチングできないものかなとちょっと思いました。それは感想だけで恐縮です。

岡野谷（特定非営利活動法人　日本ファーストエイドソサェティ　代表理事）

　ありがとうございます。これからが議論のしどころなのですけれども、後は全体会で簡単な報告をさせていただいた上でまた皆さまからのご意見がありましたらばぜひお寄せいただければと思います。

　それでは、つたない司会で申し訳ありませんでした。以上をもちまして、安全衛生分科会を終了させていただきます。